

【現地を訪問して思うこと】

文責：岸田徹

この東北応援ツアー岩手県コースに参加して、大きく印象に残ったことは2つある。ひとつめは、被災地は予想外にも何もない原っぱだけだったということ。ふたつめは、NPOなどの東北復興を掲げる団体が来年度から政府の支援が打ち切られ、多くの活動が難しくなることである。

まずはじめに、ぼくがこのツアーに参加しようと思ったのは昨年「がん宣告」されたことがきっかけだった。「人の命は有限である」それを強く感じさせられた出来事であった。それから、治療などは今も続けているが生きているうちに東日本大震災の被災地に赴いて、「生きる」ということはどういうことかを感じて勉強したいと思いからだった。

実際にこのツアーに参加させてもらおうと考えることはすごく多かった。とりわけ印象深かったのは、被災地跡が「何もない」という状態。それは、かつて人がいたとは思えない、静けさと空間だった。陸前高田市を訪れ、駅跡前で被災前の活気ある写真を見せてもらう。それと比較するように、それがあつたと思われる場所を眺めてみる。しかし、そこにはただ原っぱが広がっているだけ。瓦礫も撤去され、誰も歩いていない、ただ草が生えているだけの空間。ぼくはそれを見た時に、「何も残らない」ということを実感した。

しかしそれとは逆に、これから復興しようとする人達の姿もあつた。その日の夕方、特定非営利活動法人の「大槌刺し子プロジェクト」の方が復興への支援の一貫として刺し子プロジェクトをプレゼンしてくれた。伝統である刺し子を通して、地域を復興しようという狙いだ。そして、そのプレゼンの中に「刺し子をしている被災したおばあちゃん達の笑顔の姿」があつた。ぼくはそれを見た時に、何も残っていない状況でも、笑顔や希望はまだ残っているのだと感じた。「被災しても残り続けているもの」それを深く考えさせられた出来事だった。

ふたつめに印象に残ったこと、政府の支援が来年度から打ち切られるという事実だ。それはとても今後の復興にとって懸念材料だろうなと思った。被災地を復興しようとしても、まだまだ人とお金が足りていないということは現地で

訪問して重々わかった。例えば、被災者の居住区。まだ大半の被災者の方たちがマンションやアパートなどの建物で暮らせず、プレハブ小屋で生活をしている。もうプレハブ小屋も老朽化してきているとも聞いた。新しいマンションやアパートは現在建てようとはしているのだが、人員と資金がまだまだ足りず、工事が追いついていないのが現状だった。そして、来年度から全てではないが多数の被災地復興のための NPO 法人に対して、政府からの資金提供がストップするということを知った。まだまだ復興も途中なのに、どうしてかという気持ちは隠せない。しかし、そう愚痴を言ってもいられない。どうすることが一番東北にとってベストなのだろうかとぼくは考えた。そして、今のぼくたちにできる事、今後東北がより発展していくためには、シンプルではあるが、自分たちが頑張って稼いだお金などでこれからも援助し、復興に協力し続けるしかないなと心に強く思った。

今回参加して、何も残っていない状況でもまた新たに創りだそうとしている人々を知ることが出来、また、今ぼくたちができる事についてこれからも深く考えさせられた。「生きる」ということはそう容易いことではない。しかし、上を向いて生き続けるためには笑顔と希望が必要だということを感じた今回の東北応援ツアーであった。